

企業家研究フォーラム 2025 年度冬季部会大会

日時：2025 年 12 月 20 日（土）14:00～17:30

場所：慶應義塾大学三田キャンパス第 1 校舎 101 教室

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html> （キャンパスマップ①の建物）

参加費：無料（懇親会は別途有料）

共催：経営史学会関東部会

テーマ「職業婦人の経営史」

戦間期の日本では、産業化の進展に伴って拡大するホワイトカラー職業へ進出する女性が「職業婦人」というカテゴリーで括られて、社会的な注目を浴びた。同時代の大都市の諸調査から浮かび上がる一般的なイメージは、これが相対的に学歴が高い未婚女性の、「家計補助」を動機とする働き方であるというものである。しかし、これらの調査の背後には「女性は家のために生きるべき」という規範意識があり（濱、2022）、調査票の設計自体にバイアスがかかっている可能性がある。また「職業婦人」と一口にいても、事務職と資格制度がある専門職では女性たちの働き方は違っていた。近年、「職業婦人」についての歴史研究が活発化し、対象とする職業は事務員から看護婦や電話交換手など専門職へ、対象時期も戦間期から戦時期へと広がってきているが、彼女たちの処遇や働き方について、経営内の一次史料に基づく分析は未だ緒に就いたばかりである（鈴木、2023）。このような研究状況を踏まえて、本パネルでは、戦間期における女子実業教育の発展と「職業婦人」について必要とされた学歴・資格について整理した後、看護婦・和文タイプライター・事務職員の人事管理のあり方をそれぞれ個人のレベルにまでおりて実証的に明らかにする。また、20 世紀初頭から石油危機直後に至る就業＝雇用パターンの長期動向についても、事務職のケースをとりあげて検討する。

【引用文献】濱貴子（2022）『職業婦人の歴史社会学』晃洋書房。／鈴木良隆（2023）「職員層への女性の進出と「女の仕事」の形成：1918～41 年」『三菱史料館論集』24、91-108 頁。

《プログラム》

司会：谷本雅之（大妻女子大学）

14:00 - 14:05 菅山真次（東北学院大学）：問題提起

14:05 - 14:40 報告 1 橋野知子（神戸大学）

「戦間期における女子職業教育の展開と職業婦人」

14:40 - 15:15 報告 2 榎 一江（法政大学）

「日本の経営はいかに女性を活用してきたか」

《休憩》15:15 - 15:30

15:30 - 16:05 報告 3 木山 実（関西学院大学）

「三井物産と和文タイプライター：発明家杉本京太にも注目して」

16:05 - 16:40 報告 4 菅山真次（東北学院大学）

「女性事務職員の戦前と戦後：日本毛織のケース、1909 年～1974 年」

16:40 - 16:55 コメント：中村尚史（東京大学）

16:55 - 17:30 討論

以上